8 月 15 日のメッセージ

聖書：コロサイの信徒への手紙　3：　18－4：2

「主を信じる者にふさわしく」

様々な困難を抱える中で、家族の存在が慰めになることがあります。特に、肉親を失った時、家族に支えられたという経験をした方も多いでしょう(「イサクは、母サラの天幕に彼女を案内した。彼はリベカを迎えて妻とした。イサクは、リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た。」創世記24:67)。家族はとても大切な関係として聖書の中に描かれています。

しかし、注意しなければならないのは、家族によって与えられる慰めは究極の慰めではないということです。真の慰めは神からのみ与えられるということを私たちは知っています。

ところが、「家族だから」と、その関係に胡座を掻いて相手を顧みず、自分だけが慰めを受けようとしてしまうことがあります(「汚れた霊は、……自分よりも悪いほかの七つの霊を一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうなると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになろう。」マタイによる福音書 12:43-45)。これは健全な関係とは言えません。当たり前のことですが、一方的な搾取となってはならないのです。もちろん、妻や子どもを大切に扱うのは良いこと(「妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木。」詩編 128:3)ですが、まるで財産やアクセサリーのように取り扱ってはなりません。また、「家族だから」と言って、同じところを見つめ、同じように歩む必要はありません。

神は一人ひとりを大切にしてくださいます。ならば、私たちも一人ひとりを大切にしたい。だからこそ、違いを持ちつつ、彩り豊かな関係を築きたいと願います。しかしそれは、簡単な道のりではありません。安易な解決を求めて、自分を殺して相手に仕えることもあるでしょうが、その必要はありません。「主を信じる者」として互いに尊重し合うことが大切です(「妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。」コロサイの信徒への手紙 3:18)。

そして、「家族」とは、血のつながりのことだけを言うのでもありません。様々な結びつきによって、私たちは「家族」となることができます(「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」マタイによる福音書 12:50)。

その意味において、家族とは「すでにあるもの」ではなく、「なっていくもの」です。一度、関係が構築されたからと言って、それで完成ではありません。家族関係も一種のプロセス(過程)です。家族としての「つながり」を共に模索し、共に構築し続ける。その道は「平和」へとつながっているのです。